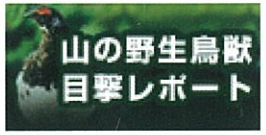
入笠山（長野県）の牛牧場の牧草を無断摂食するシカの群れ。
長野県伊那市ご提供

検索サイトから「山の野生鳥獣」で検索できます。
www.jma-sangaku.or.jp/conservation/yaseichoju/

表記山岳団体のホームページからもアクセスできます。



携帯電話の場合QRコードからアクセス出来ます。

目撃レポート

ライチョウ、シカ、クマ、カモシカなどを見かけたらパソコンや携帯メールで目撃情報をご連絡ください。

◆対象地域：標高500メートル以上の全国の山岳

◆調査期間：2009年～2014年

■どんな動物でしたか
（ライチョウ、シカ、クマ、カモシカ、その他）

■どれほどの数でしたか
（目撃数、更に　雌雄、親子など）

■何日でしたか

■何時ごろでしたか
（午前　午後）

■どこでしたか
（都道府県、山域、山名）

■どんな場所でしたか
（標高／高山植物帯、ハイマツ帯、樹林）

■どんな天気
（快晴、晴れ、曇り、雨、霧など）

この調査は「山岳団体自然環境連絡会」（日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、東京都山岳連盟、山のＥＣＨＯ）が連携し、全国的な活動として行っています。

山の野生鳥獣 目撃レポート

このレポートでは、登山者の皆さんの参加で、山で目撃した野生鳥獣の情報を集めています。

山岳団体自然環境連絡会

HAT-J　ECHO

後援　環境省生物多様性センター

その本来の姿を失いつつある、と言われている自然。山では、ライチョウの棲息減少、増えすぎたシカ、クマやサルの人里への侵出など、変化が顕実化してきています。これらの変化は、連鎖的・相乗的に生態系全体に深刻な影響を及ぼしています。

これらの野生動物の棲家を活動のフィールドにする登山愛好家として、これら野生鳥獣の保護と適正管理は大きな関心事ですが、まずは、生息の実態を把握することからはじめるべきと考え、全国の山岳地域を対象に5年間の継続調査を予定しています。登山愛好家の皆様のレポートへの参加をお願いします。

シカ：草食性の動物で、基本的に植物ならば何でも食べ、一日に一頭あたり３～５kgの草を食べるという大食漢です。
昭和４０年代に密猟などで激減したことで、個体保護が布かれ、繁殖力が強いシカを急激に増殖させることになりました。一方、かつての造林政策が生んだ針葉樹の森は、今や陽光を遮り、下草の発育は停滞させことと重なって、増えすぎたシカは餌場を求めて生活圏の移動を余儀なくされてしまいました。

ライチョウ：中部山岳などの高山地帯という限られた地域で、最も苛酷な環境で生きる鳥です。
最近では個体数が減少したとされ、低山の野生動物の高山帯への侵入と植生の衰退や、オコジョや大形猛禽類といった古くからの捕食動物や低山から高山に侵入した捕食動物の増加したこと、また地球温暖化等の様々な山岳環境の変化がその原因と指摘されています。

クマ：日本の野生動物の頂点に立つ大型獣。夏は主に山岳地帯や森林に生息し、植物食傾向の強い雑食で、春はブナなどの新芽を、夏は主にアリ、ハチなどの昆虫類、アザミなどの草本類、ウワミズザクラなどの液果類、秋は主にドングリ、クリなどの堅果類やアケビ、ヤマブドウなどの漿果類を食べる。冬季に冬ごもりを行う。異常遭遇や異常出没などによる人間とのトラブルが報告されています。

カモシカ：昭和30年(1955)に現行の「文化財保護法」により特別天然記念物に指定され、崖地を好み岩場や急傾斜の斜面のある森林を好んで生息しています。好奇心が強く、人を見に来るともいわれます。冬などで長時間もじっとしていること(「アオの寒立ち」と呼ばれる行動)が観察されます。鹿とちがって縄張りを持ち、決まった領域で生活しています。

サル　昼間、群れをなして仲間からはぐれないように固まりながらも適当に散らばり、ぶらぶら歩きながら草や木の実、葉っぱ、芽などを採食し、暗くなると適当な林の木の上で、それぞれ親子兄弟や仲の良いサルたちが抱き合って眠ります。

イノシシ　オス・メスは別々に活動します。メスの子どもは母親とともに群れを作りますが、オスの子どもは1-2歳で母親のもとを離れ、小さな群れを作るか、単独生活をしています。寿命は短く、最長でも10歳以下、平均では１歳に満たず、そのほとんどが1歳未満で死亡とのことです。

キツネ　平地から山奥まで広い範囲に生息します。比較的人家の近くにも現われ、ネズミ類・小型鳥類・昆虫などの小動物を主食とし、果実や人家のごみを食べることもあるようです。春先に巣穴を掘って、平均四頭の子を産み、夏まで家族群で生活し、秋から冬は単独生活をします。